

# 聖心女子学院の歴史 1

聖心女子大学を含む聖心女子学院の創立母体は、カトリックの女子修道会・聖心会です。聖心会は、マドレーヌ=ソフィー・バラ(聖マグダレナ=ソフィア・バラ)によって、フランス革命後の混乱する社会で人びとにイエス・キリストの愛のみ心(聖心)を伝える教育を行うために、1800年に創立されました。ソフィーは23歳で修道会の最初の総長に選ばれてから63年間、総長を務めました。1865年に彼女が帰天した時、聖心会は、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカに広がり、89の学校と、3,500人の会員を擁する会へと成長していました。

## 聖心会の歴史

- 1779年 マドレーヌ=ソフィー・バラ誕生。
- 1789年 フランス革命始まる(-1795年)。
- 1800年 聖心会創立。
- 1818年 フィリピン・デュシェーンがアメリカに学校を創立。
- 1852年 フィリピン・デュシェーン帰天。
- 1865年 マドレーヌ=ソフィー・バラ帰天。

## 日本の歴史

- 1787年 寛政の改革始まる(-1793年)。
- 1841年 天保の改革始まる(-1843年)。
- 1854年 日米和親条約(開国)。
- 1868年 王政復古の大号令(明治維新)。



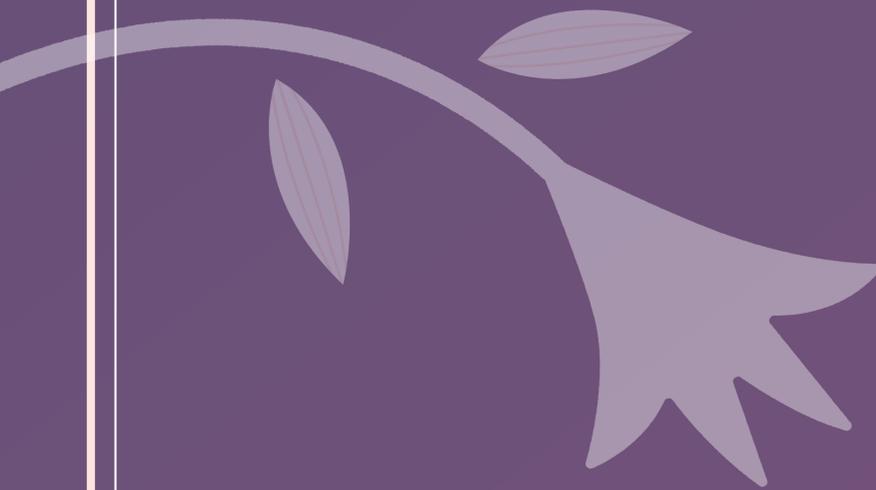
聖マグダレナ=ソフィア・バラ  
(1779-1865)



聖ローズ=フィリピン・デュシェーン  
(1769-1852)

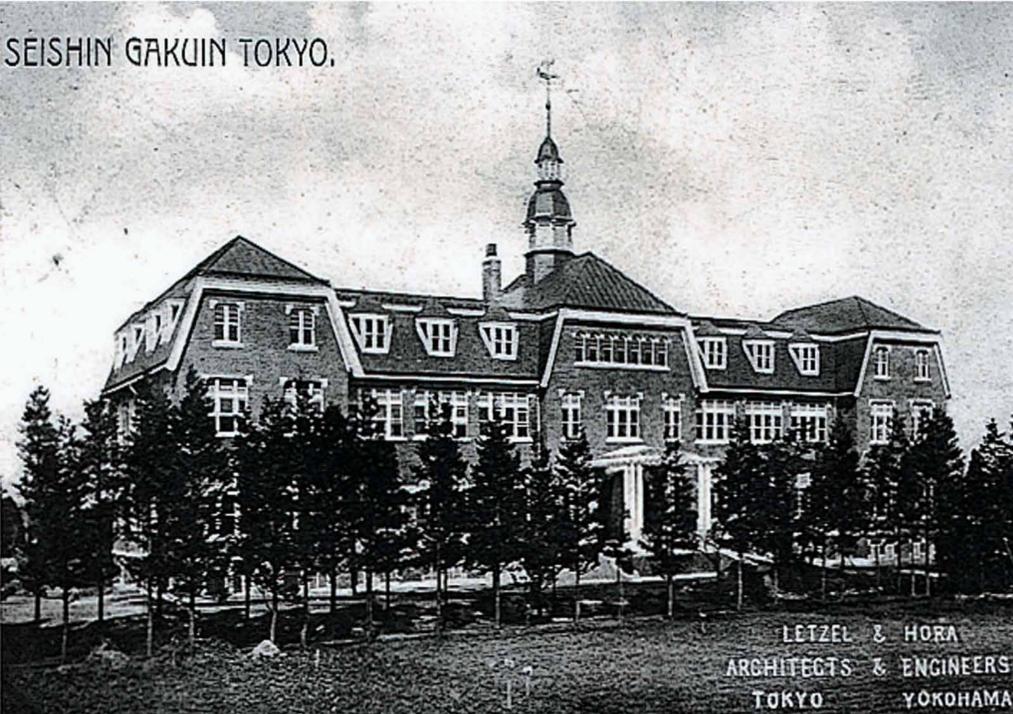


# 聖心女子学院の歴史 2



聖心会は、教皇ピオ10世からカトリックの女子高等教育機関の設立を委託され、1908年(明治41年)にオーストラリア管区から最初のシスター5人が来日しました。アジアの国では初めてのことでした。

聖心会初の日本人シスターとなる岩下亀代子は、姉の雅子とともに、聖心会が最初に開設した語学校の第一期寄宿生となりました。初期の日本人入会者としては、他に伊藤マリ子(アメリカ名ルビー・ギブス。語学校卒業。のち日本に帰化)、永井チヨ(高等専門学校第4回生)、吉川茂仁香(語学校から住吉聖心に移り、高等専門学校第9回卒業生。のち聖心女子学院校長)などがいます。彼女らはアメリカやオーストラリアでシスターになるための修練期を送りました。聖心女子学院からは、聖心会だけでなく他の多くの女子修道会のシスターが輩出しています(1958年に出版された『聖心女子学院創立五十周年史』によれば、その時点で120名以上)。



最初の校舎（1909年落成）（聖心女子学院アーカイブズ蔵）

設計はヤン・レツル（広島県物産陳列館（現在の「原爆ドーム」）などの設計者）。赤煉瓦3階建て。耐震設計であったため、関東大震災で損傷は受けたが倒壊しなかった。

聖心会は1908年（明治41年）に来日するとすぐ、教育の場を求める在留外国人家庭などのために聖心女子学院外国人部（語学校。現在の聖心インターナショナルスクール）を設立しました。1910年（明治43年）には、現在も聖心女子学院のある芝白金三光町に聖心女子学院高等女学校、小学校、幼稚園が設立され、寄宿舎も設置されました。やがて、1916年（大正5年）には、聖心会来日の目的であった女性のための初のカトリックの女子高等教育機関として、私立聖心女子学院高等専門学校が開校されます（聖心女子大学の前身）。同校の最初の2名の卒業生は、卒業の年に、3,40代の男性に混じって、難関だった（合格率約10%）文部省の中等教員資格検定試験（英語）を受験し、合格しました。その後も、多くの合格者を出したことから、同校は、帝国大学などの官立学校と同様に、この試験を受験しなくても学校の課程を修了すれば教員資格を取得できる「無試験検定」の指定校（当時女子学校では、他に日本女子大学校と津田塾のみ）となったのです。1923年（大正12年）には、兵庫県にも「住吉聖心女子学院」が創立されました（1926年に武庫郡吉元村（現・宝塚市）に移転して「小林聖心女子学院」と改称）。関東大震災（1923年9月1日）では東京の聖心女子学院の校舎の大半が損傷し、シスターの引き上げの意見も出ましたが、院長のメアリー・シェルドンはとどまることを決意し、早くも10月1日にはテント張りの小屋などを使い授業を一部再開しました。

# 聖心女子学院の歴史 3



高等専門学校第1回卒業生（英文科）（『聖心女子学院創立五十年史』より）

1920年（大正9年）に、英文科の最初の卒業生となった小杉文子（左）と川瀬渡（右）は、卒業の年に、文部省の中等教員資格試験に合格した。川瀬は、その後ロンドン大学に留学し、帰国後、高等専門学校の教授や小林聖心女子学院校長を務め、戦後は聖心女子大学教授も務めた。



第二次世界大戦前の校舎（1925年～28年にかけて落成）（聖心女子学院アーカイブズ蔵）

左手の校舎は、大震災で損傷した最初の校舎を改修したもの。右手の校舎は、1928年（昭和3年）に落成。鉄筋コンクリート2階建て（一部3階建て）で、2階に聖堂が設けられた。設計はアントニン・レイモンド（帝国ホテル設計施工の助手としてフランク・ロイド・ライトとともに来日。小林聖心女子学院本館も同時期に設計）。右手のコンクリート校舎は第二次世界大戦の戦災を免れ、現在でも初等科校舎として用いられている。



空襲で焼失した聖心女子学院本館(手前)と焼け残った校舎(奥)

(聖心女子学院アーカイブズ提供)

焼け残った建物(2階の聖堂と1階の教室)は現在でも用いられている



# 聖心女子学院の歴史 4



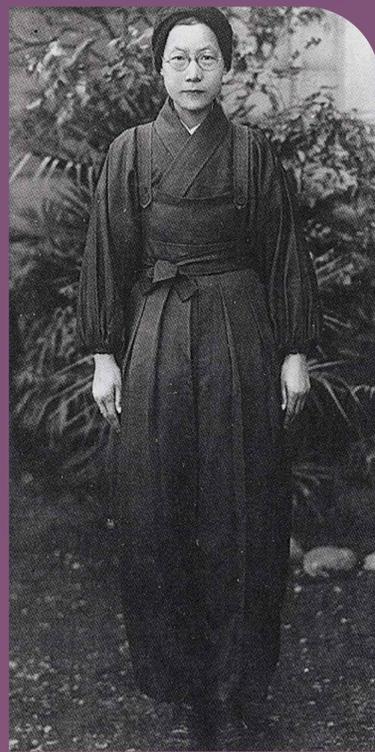
慰問袋(聖心女子学院アーカイブズ提供)

慰問袋(戦地の兵士に日用品や菓子などに手紙を添えて送る袋。学校による戦争協力として作製が割り当てられた)と思われるものを積み込む聖心女子学院の生徒たち

戦時体制が強まる中、東京の聖心女子学院では外国人シスターが校長であることが問題視されたことから、1939年(昭和14年)には創立以来教頭を務めていた平田トシが最初の日本人校長に就任し、1941年(昭和16年)からは、高等専門学校の卒業生で聖心会のシスターとなっていた吉川茂仁香が校長となって、戦後まで務めました(小林聖心女子学院は、創立時から日本人が学監や校長を務めていました)。反英米感情が高まる中、中学校や女学校では英語が必修科目から外されましたが、聖心女子学院では課外科目として維持されました。太平洋戦争が勃発すると、英米などの国籍を持つシスターたちは、他の修道会のシスターたちと共に収容施設に集められ、終戦まで軟禁状態に置かれていましたが、学校の運営や授業は収容を免れた外国人シスターや日本人のシスター、そして他の教員によって続けられました。戦局が厳しさを増した1943年(昭和18年)秋以降は、東京でも小林でも、女学校以上の生徒たちは工場などに勤労奉仕に動員されたり、学校そのものが工場に転用されたりして、授業がまともに行える状態ではなくなりました。1945年(昭和20年)3月の東京大空襲では、東京の聖心女子学院は一部校舎を除き焼失しました。



食料の不足を補うために校庭は学校農場に変えられた(聖心女子学院アーカイブズ提供)



㊦ イエスの十字架(不二聖心女子学院提供)

空襲で焼失した東京の聖心女子学院に掲げられていた十字架のイエス像。このイエス像の手前で延焼が食い止められた。戦後、不二聖心女子学院に修道会の墓所が作られたとき、このイエス像を用いて十字架が作られた。

㊦ モンペ姿の校長シスター吉川

(『みこころ會々報第70号』より)

当時シスターがこのような脚を見せる衣服を着ることはなかった